

第78回 近畿地区 大学建築系学科  
卒業設計コンクール応募作品一覧

令和6年4月9日 日本建築学会近畿支部

No.	作品名	学生氏名	大学・学科	図面枚数
1	Gateway 六甲山と「生田川」をつなぐ「新神戸駅」の再生計画	竹内 歩	武庫川女子大学 景観建築学科	10
2	生きる記憶を紡ぐもの	岩田祥英	京都工芸繊維大学 デザイン建築学課程	21
3	南海ダイバーシティライン 廃線の特性を活かした都市の多様性を継承し且つ増幅させる建築の提案	境 理央	滋賀県立大学 環境建築デザイン学科	20
4	地車創生譚—市民にひらく岸和田だんじり合同修理拠点—	泉 貴広	神戸大学 建築学科	9
5	霧の行方 船舶の漁礁化に始まる離島産業	木ノ下翔太	摂南大学 建築学科	3
6	Blind Urbanism—触常者の三原則—	水野翔太	大阪公立大学 建築学科	37
7	イキモノタテモノ	野口舞波	大阪工業大学 空間デザイン学科	18
8	六甲山へ歩みを運ぶ空中庭園—駅前ペDESTリアンデッキによる建築と庭園の融合—	河浪美紘	武庫川女子大学 建築学科	14
9	滲む境界—桜と水を歩く大和郡山のえきまち—	矢部花佳	関西大学 建築学科	8
10	山科水辺再編集—都市と河川空間の結びを再考する—	西田匡慧	京都橘大学 都市環境デザイン学科	8
11	森を育てる、森に還す	横井 琳	京都芸術大学 環境デザイン学科	8
12	生活するように演じる—丘陵住宅地劇場化計画—	原園麻実	京都工芸繊維大学 デザイン建築学課程	11
13	点を線に 線を輪に 地域に根差したフリースクールの設計提案	宇田川智子	京都女子大学 生活造形学科	4
14	感情の痕跡	坂本野土花	京都精華大学 建築学科	23
15	牛人、または橋	小幡 直	京都大学 建築学科	20
16	つながりを意識した長屋型集合住宅の提案—彦根市開出今団地を敷地として—	尾崎梨帆	滋賀県立大学 生活デザイン学科	7
17	狭間の場	碓井菜月	大阪芸術大学 建築学科	20
18	僕がいた街 22年前からの置き手紙	宮田凌誠	京都美術工芸大学 建築学科	29
19	<a href="#">日常の痕跡</a>	吉本 楓	大阪工業大学 建築学科	19
20	<a href="#">野生ノ都市像 インフラ集積に住まう未来</a>	濱田智大	大阪大学 地球総合工学科	11
21	変化するロジーまちとスケルトンインフィルの新たな関係—	宮本文若	大阪電気通信大学 建築学科	10
22	都市を紡ぐ—小川の痕跡の再編計画—	平山晴菜	京都府立大学 環境デザイン学科	17
23	延焼遮断住宅網—木とコンクリートがつくるこれからの密集市街地住宅—	田口紗衣	大阪市立大学 居住環境学科	10
24	「空間・人・時間」を紐帯する建築的河川空間	池野光美	大手前大学 建築&芸術学科	13
25	大阪テロワール—都市らしさを呼継ぎ、体験領域を拡張させる都市再生計画—	森 恭彰	大和大学 理工学科	16
26	<a href="#">和紙の里—地場産業のプロセスが生み出す建築と風景—</a>	壹岐裕実子	奈良女子大学 住環境学科	12
27	遊動するくらしのすゝめ—ナリワイと分かち合いの自由が展開するこれからの坊勢島—	柳内あみ	神戸大学 建築学科	11
28	あすなろう 駅の道～オモイをつなぎ、キザムための空間	中島百香	成安造形大学 芸術学科	18
29	発酵をお裾分け	森結希乃	摂南大学 住環境デザイン学科	5
30	地域に開かれた児童館併設型公民館の計画～生駒市人権文化センターと小平尾南児童館の建て替え提案～	浅野瑞輝	帝塚山大学 居住空間デザイン学科	4
31	彩への道標—発達障がい者とわたしたちの共生のあり方—	松木咲依	立命館大学 建築都市デザイン学科	10
32	小豆島の戸形地域の活性化を図る複合施設の提案	児島里奈	武庫川女子大学 生活環境学科	14

(受付順) 以上32点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部  
令和5年度近畿地区大学建築系学科  
卒業設計コンクール（第78回）審査報告

審査員長 梅田善愛

2024年4月9日（火） 審査会場：Web会議システムを利用

審査員長（互選） 梅田善愛  
審査員（50音順） 岡 隆裕・小平弥史・児玉克史・根木和人・平岡公章・三好陽介  
応募作品 32点（別紙参照）

### 審査経緯

第78回審査会は、第74回から続くWEB開催となり、設計事務所及びゼネコン設計部所属の実務経験豊かな7名により審査が行われた。各審査員は事前に送られた作品データを丹念に読み込み、自分なりの順位付けを行った上で審査会に臨み、丁寧な議論を行いながらも審査会はスムーズに進行した。

応募32作品はいずれも力のこもった作品であり、学生それぞれの課題意識、課題の背景にある社会問題や場所が抱える問題の掘り下げ、それらに対するソリューションを懸命に探った痕跡が感じられ、どの作品も見応えがあった。

第1次審査では32作品に対し、各審査員が1作品に対し1票ずつ、6票を上限に投票を行った。投票結果は、5票3作品、4票2作品、3票3作品、2票1作品、1票8作品となり、この時点で得票の無かった15作品は選外とした。得票数1票の8作品について、各審査員から票を投じた作品の魅力について解説を行い、意見交換をしたうえで第2次審査へ進んだ。

第2次審査では17作品に対し各自4票の投票を行い、6票1作品、5票1作品、4票2作品、3票1作品、2票2作品、1票2作品の結果を得た。この時点で得票のあった9作品の全てについて改めて内容の確認と議論を行い、9作品すべてを対象に第3次審査を行うこととした。

第3次審査では各自2票を投票し、6票1作品、3票2作品、1票2作品の結果を得た。得票のあった5作品のうち、6票を得た作品は課題設定、ソリューション、プレゼンテーション全てが明快な説得力を持ち第1次審査より高得票を得ていた。残る4作品は第2次審査での議論によって逆転が起こるほど評価が拮抗していたため、得票数1票の2作品に対し、改めて内容の確認と議論を行い、6票を獲得した1作品と3票を獲得した2作品の計3作品を入賞作品と決定した。この段階で得票のあった5作品は、いずれも「学生、生徒の設計技能向上」という当コンクールの目的に沿う魅力ある作品であり、その中から3作品を選び取るのは非常に心苦しい思いであった。

最後に、学生たちに作品づくりを通して、社会との関りや建築の持つ力について多くの議論やアドバイスが行われたであろう各大学の先生方の努力に、心からの敬意を表したいと思う。

（梅田）

## 審査概要

今年の卒業設計は各大学を代表する魅力的な 32 作品の応募があり、審査は事前に送付された PDF データを各審査員が読み込んだ上、リモートで行われた。

今年の特徴としては調査、分析やダイアグラム等でのコンセプト説明に比重が置かれた作品の割合が多く、造形性を意識した作品が新鮮に映る傾向にあった。又、つながりや日常性をキーワードとした作品も多くコロナ禍以降の社会性を反映しているとも感じた。

審査においては各作品のテーマやアプローチ等が多様であり設計者の 4 年間の思いをくみ取るべく、各審査員が読み解き推す作品についてアピールポイントの説明を行うなど丁寧に議論が重ねられたと感じる。

その中で入選した 3 作品はテーマは全く違うものの課題設定から最終形に至るストーリー性に優れ、かつ完成度がありセンスや熱量、叙情性を感じる個性的なプレゼンテーションが他作品に対して突き抜けた魅力を持つ作品として評価され選出された。選外となった作品の中にも光るものがあり、審査する側もよい刺激を受けた審査会であったことをつけ加えたい。

(三好)

## 入選作品 (3 作品) 選評

(五十音順)

### 和紙の里—地場産業のプロセスが生み出す建築と風景—

壹岐 裕実子君 (奈良女子大学)

地場産業として和紙づくりが盛んだった鳥取市青谷町。かつて 83 軒もの事業所があったこの町も、今や 11 軒の事業所が残るだけとなり、その内 8 軒は後継者がいない状況で過疎化が進行している集落である。その集落を舞台に、地場産業の発展と集落の魅力を発信する和紙工房を中心とした施設群の計画である。

「集落独自の魅力が反映された建築や風景を作りたい」という強い思いが、設計にも反映されており、和紙工房をはじめ非常にきれいなパースが印象的であった。集落のランドスケープに合わせて和紙工房や展望台が計画され、集落の風景に馴染んでいる。和紙工房や集落の様子を切り出したシーンのパースは、まるでこの集落を歩いているかのようにも思えた。

和紙作りの体験や宿泊に留まらず、和紙の原料栽培や地域住民の参画を踏まえた運営まで意識している点も評価したい。

地方創生が謳われて久しいが、それぞれの土地の自然にあった独自の文化である地場産業のプロセスを建築化して集落の魅力とすることが、持続可能なまちづくりのひとつの答えと感じる魅力的な作品であり計画だった。

(平岡)

作者は「豊かな都市像を描く」と謳っているが、明るい未来を描こうとしたのか、それとも人類が甘受しなければならない将来像を示したのか、捉え方が二分するインパクトのある作品である。かつて自然の恩恵を受けながら慎ましく暮らしていた人類が、やがてインフラネットワークを確立し、資源を欲しいままに自身の居住場所へ引き寄せる。その傲慢ともいえるふるまいの行きつく先は、インフラと生活域が反転する、つまりインフラ機能が都市を乗っ取り、人類はそれらに寄生する。個々の都合は良いかもしれないが、社会は決して豊かとはいえない将来像を描いているように感じた。特に模型の作風がそうさせている。しかし見方を変えれば、人口が減少し、既成インフラの維持も一層難しくなっていく時代に即した、比較的小さい集合体での、新しい形の「自給自足の暮らし」と原点回帰する「コミュニティの形成」を提案しているようにも感じられる。各インフラシステムは空想科学的ではあるが良く考えられており、想像をかき立てられる作品であった。

（根木）

## 日常の痕跡

吉本 楓君（大阪工業大学）

JR 西明石駅の近く、立体的な幹線道路と下道に囲まれた傾斜面のある空白地帯のような三角形の敷地に計画された、コミュニティを誘発する施設群の計画。丁寧なスケッチを通じて、西明石のまちの一見何の変哲もない日常の風景の中に残された些細な生活の痕跡を見つけ出し、本置き場や畑の休憩所、共用台所、アトリエやバス停といった機能が、舞台や石積・階段で空間化され、独自のリアリティを持った魅力的な模型とドローイングによってデザインとして落とし込まれている。伝統や文化的な価値の外にある、とりとめもない日常に着眼し、日常の延長にあるべき、ささやかではあるが良質な建築空間とプログラムを提案する地に足の付いた設計は、私的な原風景や地域共生建築といった、よくありそうな卒業設計の枠を軽やかに超えて腑に落ち、痕跡を媒介とした「ちょっと良い」アクティビティの連なりを素直に一生活者として体験してみたいと思うに至る作品であった。

（岡）